

社会人の論文づくりの基礎論

1. 学びの環境条件をとらえる

- (1) 放送大学の性格
- (2) 研究の実体をつくる必要性

2. 学びに関する自らの客観的な位置を知る

- (1) 論文を書く上での前提条件は満たしているか
- (2) 論文づくりに関する最低限の要件とは何か
- (3) 実用日本語能力を駆使できるか

3. 社会人の視点から、論文づくりの基本を見直す

- (1) 論文づくりの位置づけを見直す
- (2) 仕事と結びつけて考える方法を習得する
- (3) テーマ選択や論証の方法にかかる絞り込みの必要性
- (4) 取り上げる問題は、時間的蓄積と結びつきやすいものに絞る

4. 論文づくりに関し、自前の方法を開発する

- (1) 論文づくりを内的に導くものの必要性
- (2) 論文づくりに関し、自前の方法を開発する
- (3) 方法開発の各論

社会人の論文づくりの基礎論

1. 学びの環境条件をとらえる

社会人の論文づくりの問題に入る前に、その前段となる学びの環境条件についてみておこう。より具体的には、放送大学大学院で学び、論文を書こうとする者を想定し、そこでの学びが成果とつながるようにするにはどうしたらよいか。こうした観点から、学びの環境条件をみってみる。

(1) 放送大学の性格

放送大学は、その出自からすると、公民館の親玉的組織であり、公民館中央センターといってもよい存在である。論文を書くことからみると、ここでの問題点は、公民館組織がもともと研究機能を持つ存在ではないところにある。

一方、論文づくりは、研究を欠いたところでは初歩的な意味でも成り立ち得ない。したがって、放送大学大学院において論文を書くということは、端からかなりの問題を抱えている。このことにまず注意しておかなければならない。

(2) 研究の実体をつくる必要性

放送大学は、一応、大学院と名が付いていても、研究の実体を欠くという側面があった。ところが、放送大学大学院では、論文指導ゼミと称して論文を書くことになっている。研究の実体がないのに論文を書くというのである。

では、ここに実質を与えたとしたら、どうすればよいのか。これは研究の実体をつくり出すより他に方策はない。したがって、ゼミ生には、論文を書く云々の前に研究の実体をつくるよう導くことが大事になる。そこで、論文づくりの方法を教えることも大事であるが、それにも増して、あるいはそれと並行して、研究の方法や研究の実体とは何かについてゼミ生にわかりやすく伝えていく努力が不可欠になる。

2. 学びに関する自らの客観的な位置を知る

論文づくりの前に研究の実体を欠くのが通常であるとする、そこで論文を書こうとする者（放送大学大学院生）は、学びにおける自分の客観的な位置がよくわからないとみてよい。そこで、こうした者が学びに入るには、学びに関する自分の客観的な位置を知っておかねばならない。このため、以下のようなことについて自分の棚卸しをする必要がある。

(1) 論文を書く上での前提条件は満たしているか

社会人の場合、論文を書く上でもとめられる前提条件が十分には満たされていない。たとえば、情動的インプット能力の基礎となる語学の習得や、物事の調べ方の訓練、数学や統計的処理手法の習得、研究方法の構築などは十分でない。これらは、初歩的レベルにも至っていない。それどころか論理的基礎に関する訓練を経していないので、筋道立てた議論自体がむずかしい。さらには、社会人としての仕事をこなすため、絶対的な時間不足が起こる。これにより、ゼミへの出席自体がむずかしくなる。こうしてみると、社会人にとつ

て、論文を書く上での前提条件が満たされていないどころか、学ぶ上での最低限の条件すら覚束ない。これが現実である。

(2) 論文づくりに関する最低限の要件とは何か

このような社会人の実情をよく知れば、そこに厳密な論文づくりの要件をもとめても意味がないとわかる。それより、論文づくりに関する最低限の要件を満たすことに主眼を置き、その上でそれを論文づくりに最大限活用するようにした方がよい。

では、論文づくりにおいてもとめられる最低限の要件とは何であろうか。これは論文の狙いが筋道立った議論により、問題の解明を行うことにあるとするなら、コトバを介して筋道立った議論ができるということに置いてもよからう。

(3) 実用日本語能力を駆使できるか

論文づくりの最低限の要件として、コトバを介して筋道立った議論ができるということあげた。これはもう少し論文づくりに近づけていうなら、実用日本語能力とでもいうかたちで筋道立てて他者に伝える力を持つかどうかに関することといてよい。つまり、コトバを介して筋道立った議論ができるかということは、より具体的には実用日本語能力を駆使できるかという条件になる。

これはさらに、日頃、小倉ゼミでいっているわかりやすいコトバを使えば、論文を書くための基礎力としての「みる、きく、よむ、はなす、かく」力がどれだけあるか問われることである。こうして、放送大学の大学院生が論文を書こうとする場合、無条件で論文づくりに取りくむわけにはいかない。放送大学の事務的要件として定めているレポートⅠ、Ⅱ、Ⅲを出しさえすればいいということにはならない。その前に、自分が言いたいことを筋道立てて伝えられる力がないといけない。実用日本語力を備えていて、それを駆使できるほどでないといけないということである。

3. 社会人の視点から、論文づくりの基本を見直す

このようにみえてくると、社会人の学びに関して客観的な位置を知ることが、大進歩といえる。こえは、そうでない状態に比べるとよくわかる。しかし、実際に論文づくりに入るには、そこにまだ距離がある。そもそも学術性の要件を厳密に言えば、社会人がそうした条件を十分に満たす論文を書くことはむずかしかった。というより、無理といってもよい。そこで、そうした困難な条件の下でも論文づくりに挑むには、社会人の学びについて見直すと同様に、社会人の論文づくりについても見直す必要がある。それは次のようなことである。

(1) 論文づくりの位置づけを見直す

まずは、社会人である自分にとって論文づくりの意義とは何かを明確にすることである。それは、今日的な環境状況の下で、社会人である自分がなぜあらためて学びを行うのか。また、その一環として、なぜ論文づくりに取りくむのか明確にすることである。

そうすると、社会人にとっての論文づくりは、社会における自分の存在意義と結びつけてとらえるのがよいであろう。この点で、広い意味でみた仕事をする力の向上に役立つも

なのであることが望ましい。こうして、社会人の論文づくりの意義は、仕事におけるプロフェッショナルな力を得たことの証明となるものとして位置づけるのがよいと思われる。

(2) 仕事と結びつけて考える方法を習得する

このように、仕事する上での基礎力の向上につながるものとして社会人の論文づくりを位置づけると、論文づくりで潜在的に社会人の優位性につながる論点と結びつくのではない。それは仕事と結びつけることにより、考える方法を習得できる可能性が高まることである。これはより詳しくいえば、次のようなことである。

日本の大学、さらには大学院を含め、考える方法を学ぶ者にわかりやすいかたちで伝えることや訓練することは、これまでほとんど行われてこなかった。大学院生の論文づくりでいえば、考える方法は、論文づくりのプロセスの中で自ら苦闘し、試行錯誤のうちに習得するしかなかった。これは一口に考える方法といっても、その対象やテーマにより、千差万別である。それゆえ、考える方法は、個々の院生が自学自修するしかないと受けとめられてきたからである。実際、こうした見解にも一理はある。

しかし、大学院が大衆化して圧倒的に大学院生の数が増える時代には、そこでの学びには標準化の要素も要求される。最低限の学びの方法は、教える必要が高まってくる。さらには、放送大学大学院のような研究の実体を欠くおそれがあるところでは、研究の実体に近づかせるという意味からも、なおさら考える方法を体得させる意義は大きい。さらに、注意すべきは次の点である。すなわち、こうした考える方法を社会人大大学院生に教え込み、仕事と関連させるかたちで体化させることができれば、社会人院生が持つ数少ない優位性になる。なぜなら、一般の大学院生は、日本の大学院の伝統の中でそうした考える方法の習得を行っていない。むしろ、これは学生のとときに考える方法を教え込まれなかった点では、社会人院生も同様である。ただし、社会人の場合は、仕事と関係づけることができれば、仕事が要求する問題解決の必要性からいって、考える方法の習得は遙かに容易である。こうしたことを指している。

(3) テーマ選択や論証の方法にかかる絞り込みの必要性

自己にとっての論文づくりの位置づけを見直し、仕事と結びつけるかたちで考える方法を習得する。これを実行しても、社会人の論文づくりの条件としてはまだ十分でない。そこには、論文づくりに関する基礎訓練の不足や、何よりそれに投入できる時間の圧倒的不足という現実が、依然として待ち受けているからである。

このことを考慮すると、社会人院生は、学卒院生とはなるべく同じ土俵で勝負しないようにするのがよい。具体的には、テーマをあまりアカデミックなものにしない。広い意味の仕事に結びつくものとし、学卒院生では取り上げにくいものにする。さらに、論証の点では、絶対的な時間不足をカバーできやすい事象や対象の解釈と整理的問題に特化する。あるいは、論証にしても実務的側面を含む実証に焦点をあてて学卒院生や専門研究者では行いにくい分野で勝負するのである。

(4) 取り上げる問題は、時間的蓄積と結びつきやすいものに絞る

社会人が持つ条件をいろいろ考慮し、それを乗り越える方法をいくつか考えてきた。し

かし、まだ乗り越えるべき問題が残っている。それは社会人が抱える絶対的時間の不足をどうするかという問題である。つまり、論文づくりは積み上げと蓄積を要する仕事であるので、一定の時間の投入を要する。ところが、社会人の場合は、この一定時間の投入の必要性という点で端から脱落することが多い。

そうすると、ここでは「1万時間の法則」を踏まえるのがよいであろう。ここで1万時間の法則とは、語学や各種の体得的スキルの習得に関して巷間いわれることである。すなわち、仕事を持つ通常の間が1日3時間の余暇時間を使って、何かの習得に努めるとする。この場合、1年間の累計の投入時間は、1日3時間×365日で1,000時間になる。したがって、これを10年続けるなら、累計投入時間は1万時間である。そして、これだけの累計投入時間が確保できるなら、普通の能力の人が普通の生活を送りながら、どのような問題であれ、専門家の域に到達できるという教えである。

社会人であっても論文づくりを実際に行うには、1万時間の法則を厳密にそのとおり適用するかどうかは別にして、一定の時間的累積投入が要求されることは間違いない。そこで、これを社会人の日常生活と折り合わせるには、この問題に関し、自分は累積でどの程度の時間的投入ができそうか、大まかな時間枠などあらましの目途を立ててみる。その上で、そうした時間的蓄積と成果が結びつきやすい問題に絞る。また、そこには論文づくりの下作業が業務として行えるような問題に絞ることも入るであろう。

4. 論文づくりに関し、自前の方法を開発する

(1) 論文づくりを内的に導くものの必要性

このようにみえてくると、社会人の論文づくりを可能にする道は、たとえ周到に考えて準備したとしても細い道である。このことを知らねばならない。そこで、その細い道を辿り、論文の完成にまで至るには、論文づくりを内的に導く何らかの存在が必要になる。つまり、社会人が抱える制約条件に抗して目標達成にまで至るには、論文づくりを支え、導くものが必要である。

(2) 論文づくりに関し、自前の方法を開発する

では、それはどのようなものか。一言でいえば、論文づくりにおいて自前の方法開発に努めることである。つまり、社会人の論文づくりにあたっては、社会人に適合したカリキュラムに基づいた論文づくりの方法論がもとめられる。さらには、これの開発に注力する必要がある。

とはいえ、こうした論文づくりに関する方法の開発は、個々の学生の力では無理である。ただ小倉ゼミの場合でいえば、幸いなことにゼミテキストの『論文づくりの方法論』(2012年版)が用意されている。また、毎回のゼミでは、『論文づくりの方法論』に基づいたゼミメニューが実践されている。これを最大限活用することである。

しかし学びの常として、与えられるものだけでは弱い。与えられるものだけがすべてであると、自分の血となり肉となることは少ない。そこで、与えられたものを元にするにしても、自分なりにそれを消化するという程度の努力が必要になる。この意味で、論文づくりに関する自前の方法を開発する必要があるということだ。

(3) 方法開発の各論

論文づくりに関する方法開発の各論とその実践的指針については、別添のいくつかのレジメにおいて示した。これらをよく読み、参照してほしい。